

絶対者をめぐって

1800 年～1802 年のフィヒテとシェリング

石 崎 宏 平

1798年いわゆる「無神論論争」を契機としてイエナを去ることになったフィヒテは、その翌年 1799 年 7 月 ベルリンに移るが、皮肉にも彼の後を継いでイエナで彼の先験哲学を展開したのはシェリングであった。もともとフィヒテの信奉者として出発したシェリングは、やがてその影響から脱出し、両者の対立は次第に明らかとなり、1802 年両者は遂に訣別する。その対立の根本をなすのは絶対者の概念であり、これに対する両者の見解の相違にある。今その対立が最も明白となり、遂に訣別するにいたる 1800 年から 1802 年にかけて両者の間に交された往復書簡を通して両思想家の基本的立場を明らかにしたい。

(1)

フィヒテがベルリンに移ってからの最初の著作は、1800 年の『人間の使命』(Die Bestimmung des Menschen)である。この著作の第三部の表題は「信 Glauben」であり、そこで彼は精神的世界の総合の問題を論じている。それは英知的なものの体系、道徳的世界秩序としての神の問題であり、いしかえれば絶対者の問題である。この問題の究明によって彼の哲学の体系は完成するはずであった。しかし考えてみればこの問題はかの無神論論争の問題にその根をもっている。1801 年 5 月 15 日シェリング宛の手紙でフィヒテは次のように書いている。「知識学は徹頭徹尾その原理において欠けるところはありません。しかしその完成という点において欠けています。即ち高次

の綜合、つまり精神的世界の綜合が為されていません。私がこの綜合を行おうと準備した時、人は無神論だと罵りました」(Fichte Briefwechsel. herg. v. H. Schulz, II. S. 323 以下 II と略記)。ここで述べられている精神的世界の綜合の問題は正に『人間の使命』で取り上げられた問題であった。この問題が解明されるためには、改めて知識学の立場が根本的に反省され論明されなければならない。『人間の使命』の第三部は「これに対する最も明確な暗示 die deutlichsten Winke」(II, 307)であったのである。しかし『人間の使命』が出版されて以後フィヒテはほとんどまる 3 年間沈黙を続け、毎日朝早くから午後 4 時頃まで机に向い、従来の知識学に対する非難と誤解を解くための『知識学の新叙述 neue Darstellung der Wissenschaftslehre』に没頭する。その間に彼は度々この『新叙述』の公刊を予告するが、しかしそれは遂に彼の生前には実現されずに終った。それは一体如何なる理由によるものであろうか、少なくともその理由の一つはシェリングとの関係にある。彼の『新叙述』は今や主としてシェリングとの論争を通してその論理的展開を深めて行ったように思はれる。

(2)

フィヒテとシェリングの間には既に 1800 年のシェリングの『先験的観念論の体系』によって明らかに示されたように、先験的哲学と自然哲学についての見解の相違が表明化されていた。シェリングは 1800 年 11 月 15 日のフィヒテ宛の手紙で「純粹な(単に主観的な)主観—客観」という概念が自然哲学と先験的哲学とを対立する学問としてではなく、同じ全体の対立する部分として考察するのが自分の立場であるという。これに対しフィヒテは、同年 12 月 27 日のリング宛の手紙で次のように書いている。「これまで明らかに表明されたすべての事からすれば、貴方の言われる主観—客観的自然における主観的なものは、まだ思维によって構想力の(明らかに我々の)産物の中に我々から移し込まれた我々の限定の類似物(ノウメノンとしての自然)にはかなりません。ところが逆に自我は、他のところで全く自我から説

明されたものから、再び説明されることは出来ません」(Ⅲ, 305)。同じ手紙でフィヒテは、『自然哲学雑誌』を受け取り、こを入念に研究するであろうと書いた後で、シェリングの立場は「先験的哲学をこれまでの原理からではなく、それと反対の、即ち先験的哲学をその原理そのものにおいて拡張することによってのみ基礎づけられる」(Ⅱ, 306)とし、自分はこの拡張された原理をまだ学問的に論じていないが、近くこれを『知識学の新叙述』において行うつもりだという。これに対してシェリングからは何の音信もないままに時は過ぎて行った。

越えて1801年1月24日、フィヒテの『新叙述』の広告がコッター一般新聞に掲載された。そこには次のような有名でしかも悪評となったフィヒテの一文が見られる。「私の総明な協力者シェリング教授は、その自然科学的諸著作並に最近出版された『先験的観念論の体系』において、先験的見解に対して門戸を提供することにとどの程度成功したか、この点を私はここで探究しようとは思わない」(Fichte-Schelling Briefwechsel. Einleitung von Walter Schulz, S. 42. 注)。その真意がどこにあったか。後に1801年10月3日付のフィヒテ宛の手紙でシェリングは、この一文が公衆に巧妙な隠された仕方で自分がフィヒテを理解していないことをこっそりと教えたものだと言及を批難している。

しばらく跡絶えていた書簡は1801年5月15日シェリングのフィヒテ宛の手紙をもって始まる。シェリングは手紙とともに論文を送って次のように書いている。「先般のお手紙ありがとうございました。早速ご返事をさし上げるべきところ、多くの仕事と必然的に余暇を与えないような病気に妨げられたのです」(Ⅱ, 313)。そしてこの論文が好意をもって受け入れられ、フィヒテの考えと一致するものであることを見出してほしいと希望する。同じく1801年4月20日シェリングはシュレーゲル宛の手紙で次のように書いている。「フィヒテに私の長い沈黙のお詫びとともによろしくお伝え下さい。私が彼の非常に興味深い手紙に返事を書かなかったのは、それがあまりに興味深かったからです。学問的な諸々の仕事と、ほとんど持続的な病気のために、私

はこの冬には特別の思慮をもって書きたい手紙のための時間はなかったのです」(F.W.J. Schelling, Briefe und Dokumente, Herg. v. H. Fuhrmans, Bd I, S. 246)。ここで言われている持続的な病気の状態というのはシュレーゲル夫人カロリーネ (Caroline) との関係及びその娘アウグステ (Auguste) の死に関する噂によるものだと考えられている。他方学問的な仕事とは何であつたのか。シェリングもまたこの時期に彼自身の哲学体系の完成へ向つて精力的な努力を続けていたのである。果せるかな 1801 年 3 月 彼は『我が哲学体系の叙述 Darstellung meines Systems der Philosophie』を書き上げ、これを 5 月 25 日 手紙とともにフィヒテに送っている。この書はすでにその題名が示すようにフィヒテ哲学からの独立宣言の意味をもっている。

さて先の 1801 年 3 月 15 日のシェリングの論文と手紙にフィヒテはどういう反応を示したか。一種の不安とともに期待をもってシェリングはこれをまつた。4 月 29 日 短い手紙がとどいた。それとともにフィヒテの小冊子が送られて来た。これはラインホルト (Reinhold) に関するフィヒテの回答文であつた。シェリングはこれを感動をもって読んでおり、フィヒテとの間に横たわる疑いは解消されたと考え、「私たち兩人は一つの同じ絶対的認識を認める」(II, 319) ものであること、即ち フィヒテもまた一切の存在を絶対者から導き出すところの絶対的認識の道を進んでいるように思はれたのである。従つて『我が哲学体系の叙述』を送つたことの返事も期待していた。しかし 5 月が過ぎ 6 月が過ぎ 7 月になつても返事は来なかつた。8 月始めにシュレーゲルがベルリンからイェナにやつて来た。その時フィヒテの手紙を持参したのである。これは既に 5 月 31 日 に書かれていたものであるが、フィヒテはこれを 8 月までそのままにしておいたのである。

(3)

この手紙でフィヒテは、『我が哲学体系の叙述』を受け取つたが、その序文で自分の体系を「観念論の普通の見方」とであるとシェリングが批判しているの対し、それは自分の体系に対する誤解が依然として存在することを示すも

のだという。それではそこにおけるシェリングのフィヒテ批判はいかなるものであったのか。

『我が哲学体系の叙述』の序文で、シェリングは次の様に言う。「フィヒテが最初にとりなした観念論は私が主張したものとは全く別の意味をもっている。例えばフィヒテは観念論を完全に主観的の意味において考えている。それに対して私は客観的の意味において考えている。フィヒテは観念論とともに反省の立場に固執し得た。これに対して私は観念論の原理とともに産出の立場に立った。その対立をもっとも理解しやすい仕方では表現するためには、主観的の意味における観念論は、自我が一切である *das Ich sei Alles*. と主張しなければならない。逆に客観的の意味における観念論は、一切が自我である, *Alles sei=Ich*. そして自我であるところのもの以外にいかなる存在もない、と主張しなければならない。両者は観念論であることはたとえ否定され得ないとしても、この両者は疑いもなく異った見解である」(Schelling Werke, herg. v. M. Schröter, IV, S. 109. 以下Ⅳと略記)。ここにシェリングのフィヒテに対する相違点が最も公式的な形で表明されている。これに対しフィヒテは自己の知識学の立場から次の様に反論する。「知識学が、知 *Wissen* を主観的と呼ぶか、客観的と呼ぶか、また知識学は観念論であるか実在論であるかという問いは何の意味ももちません。何故ら、この様な区別は知識学の内部ではじめて為されるからです。いかなる特殊な観念論も実在論も、或は自然哲学もなく、いたるところあるのは一つの学だけです。これが知識学です。他のすべての学は知識学の部分であるにすぎません」(Ⅱ, 324)。そしてこの様な知識学からすれば、シェリングのいう理性としての存在 *Sein* から出発することは出来ず、見ること *Sehen* から出発しなければならぬという。それにしてもシェリングのいう客観的の意味における観念論とは具体的にどの様な立場をいうのであろうか。今これを『我が哲学体系の叙述』によって明らかにしておこう。

(4)

シェリングはこの論文を理性の規定をもってはじめる。ここで理性は主観的でも客観的でもなく、絶対的として考えられ、絶対的として定立された理性、その意味で絶対的理性である。理性をそのようなものとして思惟するためには「思惟するものが捨象されねばならない」。そうすることによって主観的でもなく客観的でもなく「主観と客観の無差別点に立つところの真の An-sich (自体) が現われる」。これが絶対的理性である。この様な理性の認識は、物をそれがあるがままに認識すること、即ち理性の中にあるがままに認識することである。そこには主観もなく客観もない。「一切は絶対的に一つであり、端的に自己自身に等しい」。この様な理性による認識が哲学の立場である。この理性は同時にシェリングでは絶対者であるが故に、「絶対者の立場に立つ以外にいかなる哲学もない, Es giebt keine Philosophie als von Standpunkt des Absoluten」(IV, 115)。

ところでシェリングによればこの理性は同時に存在を含む。それはどのような事態をいうのであろうか。「理性の存在の最高法則は同一性の法則であり、それは $A=A$ によって表現される」。この $A=A$ は、「Aが一般にあるというのでもなければ、Aが主語としてあるいは述語としてあるのでもない。この命題によって定立される唯一の存在は同一性そのものの存在である。従ってその同一性は主語としてのAや、述語としてのAから完全に独立に定立される同一性そのもの Identität selbst である」(IV, 117)。従って存在は $A=A$ とともに定立されている。それ故「存在する一切のものは絶対的同一性そのものである Alles, was ist, ist die absolute Identität selbst」(IV, 119)と言われる。しかしその同一性の存在は思惟されることによって存在する。即ち同一性の存在の認識は、存在と同時に定立される形式であり、従って存在はその形式からいえば「その同一性における絶対的同一性の自己認識 Selbsterkennen der absoluten Identität in ihrer Identität である」(IV, 122)。そしてこの自己認識は無限である。そのためには絶対的同一性は自らを主観として、また客観として無限に定立しなければならない。絶対的

同一性の存在はその本質そのものに属するが、その認識において主観と客観に分れる。そこに差別の考えが出て来る。

以上が『我が哲学体系の叙述』におけるシェリングの客観的観念論としての同一性の立場である。この絶対的同一性に対してフィヒテはいかに自己の立場を対立させ明化して行ったか。

(5)

既に述べた様にフィヒテは1801年5月31日の手紙で、哲学は Sein からではなく Sehen から出発しなければならぬと言う。シェリングは絶対的同一性としての存在 Sein から出発する。そのような存在は同時に絶対者であった。これに対し見ること Sehen から出発するフィヒテにとって絶対者はいかに考えられているか。見ることの立場は、「自己理解 Sich Erfassen, 自己貫徹 Sich Durchdringen, 明証の作用 Akt der Evidenz」(Ⅱ, 324)としての意識の立場、「いかなる意識によっても飛び越えられない、ふたたび反省され得ない絶対的意識」の立場である。そのような立場からすれば絶対者は存在ではなく徹頭徹尾「動性 Agilität」であり、純粋な透徹性、光であり、また純粋な活動性である(Ⅱ, 326)。

これに対し1801年10月3日の手紙で、シェリングはフィヒテに対する自己の絶対的同一性の立場を一層明白にする。

「理想根拠と現実根拠 Ideal-und Realgrund の同一性は、思惟と直観の同一性です。貴方はこの同一性をもって最高の思弁的理念、その直観が思惟においてあり、その思惟が直観においてある様な絶対者の理念を表現します。この思惟と直観の絶対的同一性は最高の原理ですから、それは現実には絶対的無差別と考えられ、必然的に同時に最高の存在です。これに対して有限な限定された存在(例えば個別的な物的存在)は常に思惟と直観の限定された差別を表現します。ここでは観念的なもの Idee と現実的なもの Reale とは相互に雲らされています。両者の雲りなき無差別性は絶対者の中にのみあります」(Ⅱ, 333)。シェリングは、フィヒテもまた思惟と直観の絶対的同一

性を認め、それを最高の存在と考えていると解する。その最高の存在をしかし、「絶対的空間」と考えてほしいと言う。この空間こそ最も純粋な存在だからである。しかるにフィヒテにとっては存在は、徹頭徹尾、実在性・現実性と同義であり、また、上に述べた様に純粋な動性と考えられている。しかしシェリングによれば、この様な純粋な動性 *reine Agilität*, 絶対的活動性 *absolute Thätigkeit* は、「絶対的静止＝存在 *absolute Ruhe=Sein*」であることをまぬがれない。「絶対者についてはそれがある、*er ist* というのみで、それが活動的である *er thätig sei* とは言い得ない」(Ⅱ, 333)のである。シェリングの考えでは、絶対者は個別的なものにおいては量的差別の下に、全体においては量的無差別の下に実在する。フィヒテもまた、実在性でも現実性でもなく *ideel* なものと *reel* なものとのあらゆる対立を越えて高まるこの存在(絶対者)に高まっている。しかしその存在はフィヒテにとっては最後の総合であるが、「それが現実的に最高の総合であるとすれば、それは絶対者であり、それ故にきつと同時にそこから出発しなければならない最初のものである」(Ⅱ, 334)はずである。従ってフィヒテもこの様な存在 *Sein* から出発すべきであるのにあえて *Sehen* から出発すべきだと言う。シェリングによればそういう *Sehen* は主観性の立場に止まるものであり、そこから出発しなければならぬとすれば、フィヒテが知識学で言った様に「各自の自我が絶対的実在であり、それにとどまらねばならないことになる。また一つの把握し得ない実在根拠に向って脱出するならば、主観性への完全な還帰命令は、真の原理が見出されるまで暫定的 *vorläufig* に妥当するにすぎない」のではないか(Ⅱ, 334)。シェリングに言わせれば、フィヒテの体系はカントの哲学が、道徳法則からはじまって神に終る様に、*Sehen* から出発して(本来の思弁である)絶対者をもって終る。しかし、その *Sehen* から出発する必然性は、「貴方の哲学とともにやはり絶対者がそこで出合われない様な、徹底的に制約された線に貴方をしばりつけている」(Ⅱ, 334)とシェリングは言う。シェリングはフィヒテの終ったところから始まるのである。

以上の様な絶対者に対する両者の見解の相違は、絶対者の把握の仕方の相違として現われる。シェリングは次の様に言う。「貴方は個別者の分離されてあることの現実根拠に不可解 *unbegreiflich* という付加語を与えます。その現実根拠は勿論有限者（その分離されてあるもの）と無限者（その全体統一）の対立とともに解き難い矛盾にまき込まれる様な下からの段階的上昇による悟性の反省にとっては *für die von unten aufsteigende Verstandesreflexion* 不可解です。しかし絶対的の同一性、即ち有限者と無限者の不可分の集まりを最初のものとして定立するところの、有限でも無限でもなく両者同時に永遠であるような理性にとっては不可解ではありません。この理性の永遠性があらゆる思弁の真の観念論の本来の原理です」（II, 336）。フィヒテの *Sehen* 立場から絶対者は、下からの段階的の昇によって到達されるのに対し、シェリングの *Sein* 立場は、これを一举に絶対的な仕方ととらえる。これが永遠なる理性の立場であるとすれば、それはすべてを永遠の相の下に見るスピノザ主義的立場であると言わねばならない。フィヒテはあくまでも自我の反省的意識の立場に止まろうとする。

（6）

1801年10月15日のフィヒテのシェリング宛の手紙は両者の根本的な対立点を明示するものとして最も注目される。

先ずフィヒテは、シェリングがフィヒテの立場を説明していることについて、それが誤解と侮辱にもとづくものだという。そしてシェリングの「絶対者は量的差別の形式の下に実在する」という主張をとらえ、そこに彼の体系の誤りがあるとして次の様に書いている。「絶対者は何等かの形式の下に存在する場合、もはや絶対者ではありません。ところでしかしその形式——それは勿論量です。これについて私は貴方に同意します——の下に絶対者が現われるその形式は一体どこから来るのか、本来的にこの形式はどこにその固有の地盤があるのか。或はまたその場合、先ず一者が無限者となり、次に多様なものの全体性になるのか、それが問題です。この問題は完成した思弁

が解決すべき問題です。そしてこの問題を、貴方は、この形式をすでに絶対者に関して、絶対者とともに同時に見出しているが故に、必然的に無視しなければならないでしょう」(Ⅱ, 341~2)。この様な主張こそシェリングの立場の核心をついた批判である。絶対者はシェリングでは存在であるが、その存在は認識の形式の下にのみ現実的であるとすれば、それは絶対者についての一つの制約であるといわねばならない。そうだとすれば絶対者は、もはや絶対者であることを止めねばならない。その意味でフィヒテは絶対者そのものにその存在の述語を拒否する。

1802年1月15日のシェリング宛の手紙は上述の考え方を一層明白にすると同時により高次の知の立場からの絶対者の論明がなされる。

シェリングはあらゆる量及び関係は徹底的に絶対者の中に含まれていないというのに対して、「貴方の存在、貴方の知そのものもまた関係の中に in Relation あるのであって、貴方がこの存在と知との両方について知りかつ語る場合、両者はより高次のものによって説明されねばならないでしょう。そしてそれについても貴方はまた同時に知ねばならないでしょう。そして貴方の体系は、貴方が私の体系を告発したように絶対者に関して否定的であるにすぎません」(Ⅱ, 350)。フィヒテによればシェリングはまだ根本反省 Grund-reflex にまで高まっていない。この手紙でフィヒテは自己の立場を根本反省としての知の立場として鮮明にして行く。

知 Wissen は一般に或るものの知であるが、それは知られるものに対して知るものとしての知であり、その意味で相対的な知である。シェリングはフィヒテの知をこのような相対的知とみている。しかし「この知の並存項が最高のものであり、それは正に絶対的存在である」とシェリングは考えている。彼は知識学を越えてこのような存在の概念へ自己を高めねばならぬという。そして「この並存項を直観によるのではなく思惟によって否定的な同一性、即ち知と存在の非差異性 Nicht-Verschiedenheit へと合一している」(Ⅱ, 351)。これに対しフィヒテは次の様に言う。「然しそれにおいて正に存在とその並存項としての知がはじめて区別されると同時に合一されるところ

のより高次の点があります。この点は正にまた一つの知（あらゆるものについて
の知ではなく、絶対的な知）であり、知識学は正にこの点に立つたのです。
（そして正にそれ故に先験的観念論です）。そしてなかすずそれを、それ
においてはじめて自我——相対的として解された——と非我が区別される
ところの、自我という表現によって指示して来ました」（II, 351）。ここにフ
ィヒテの知識学における最も根原的な知の立場が今や絶対知として示されるに
いたった。そのような絶対知は、存在と知とが相分かれるとともに合一して
いるところの知として弁証法的構造をもつとともに、この絶対知の立場から
今や絶対者が論明されることになる。フィヒテは先のシェリング宛の手紙で
絶対者は（哲学の立場で理解される限り）常に *Sehen* にとどまる」ことを理
解してほしいと述べたのに対し、シェリングはあくまでも「絶対者は決して
或るものの *Sehen* ではあり得ない」という。絶対者を *Sein* とするシェリ
ングの立ちは結局スピノザ的立場に陥らざるを得ないのではないか。スピノ
ザは、一者が一切であり、また一切が一者であり、逆もまた真であるとい
うが、フィヒテはこれに対して「いかにして一者が一切になり、また一切が一
者になるのか、その移行点・転回点、現実的な同一性点を彼は示していない。
従って彼が一切から把握した時一者を失い、また一者を把握したとき一切を
失う。にもかかわらず彼はまた思惟と存在という絶対者の根本形式を、何等
のより進んだ証明なしに提出している」（II, 351）。シェリングの立場は正に
このようなスピノザ的立場のもつ欠陥を含んでいる。このようなことは知識
学の立場からすれば決して正当とは認められないのである。しかしフィヒテ
は言う。「絶対者はただ絶対的な、即ち多様に関して徹底的にただ一つなる、
単純にして永遠に自己に同等なる表現 *Äusserung* をもつことが出来ます。
これが正に絶対知 *das absolute Wissen* です。しかし絶対者そのものは何
等の存在でもなく、また知でもなく、まして両者の同一性或は無差別でもな
く、それはどこまでも絶対者です。そしてあらゆる第二の言葉は悪です」
（II, 352）。この様にフィヒテは絶対者を知に対して超越的なものとしてとら
え、それへの通路として絶対知が提示されるに到ったのである。今やこの絶

対知の論明を通して絶対者が明らかにされねばならない。

以上 1800 年から 1802 年にかけての両者の対立は、絶対者の把握及びそれへの通路をめぐる根本的な差違にもとづく。フィヒテでは、絶対者は知に対して超越的なものであり、それ故 *Sehen* の立場から段階的上昇によってのみ到達されるものとし、その媒介となるものとして絶対知が示されて来た。もしこの様な立場に立つならば、シェリングの同一性の体系は、彼の言うように知識学の補足を意味するのではなく、客観化する思惟の誤謬を意味することになる。これに対してシェリングの主張する様に、絶対者はただ一挙に絶対的な仕方では把握されるものであるとすれば、フィヒテの哲学は何等の思弁ではなく、従ってその克服は必然であったと言わねばならない。

1802 年 1 月 25 日 シェリングのフィヒテ宛の手紙は、自己の立場をスピノザの立場と同一視することに対する不満を述べるが、この手紙をもって両者の往復書簡は終り、両者は完全に袂別する。

しかしこれまで見て来た様に絶対者の問題は両者それぞれの立場から明らかにされたとしても、それによって結着がついたわけではない。この問題の究明はいずれの側においてもなお必然である。両者が以後それぞれにこの問題をいかに追求して行ったのか。それを明らかにするためには、フィヒテの 1801 年のいわゆる『知識学 *Darstellung der Wissenschaftslehre*』及び 1804 年の『知識学 *Darstellung der Wissenschaftslehre*』の検討と、シェリングの 1804 年の『宗教と哲学 *Philosophie und Religion*』の検討が為されねばならない。次に稿を改めてこれを取りあげるつもりである。